



バリアフリー ニュース

(第2号)

＝ 梅の花 ＝

3.11 東日本大震災から2年となります。
バリアフリーニュース(第2号)をお届けします。

ちょっとしたことに不便を感じます

浜中 智美さん(青森リーダー)

「バリアフリーニュースの第二号を発行するに辺り、テーマは問いません。趣味や人となりでも良いし、青森らしく『ねぶた』でも良いし、全然、バリアフリーに関係なく、堅苦しくない感じをお願いします！」と、突然、原稿依頼を受けました。

実は私、普段、会議での発言が緊張して上手く言えないだけでなく、『書く』という作業も決して得意ではない。だから、“何でも良い”が、ある意味、一番の難題なんですよ(笑)

ちょうど依頼を受けたとき、私の唯一の趣味であるライブ観戦(東北観光親善大使の“モンキーマジック”)が控えていたのでライブの感想でもと思いながら、あまりにもフランク過ぎるな～と悩み、今回は、便利グッズの中で、もっと便利になったらいいなあ～と日々感じているモノをテーマに書きたいと思います。

それは、今や、コンビニや学校給食など、さまざまな場面で広く利用されるようになったユニバーサルデザインの容器です。「ディスペンパック」って皆さんは知っていますか？手を汚さず、片手でパキッと折ってプシューって中身が出てくるアレです。普段、何気なく使ってますよね。気づかないうちに便利の恩恵を受けてるんですよ～。ケチャップ&マスタード、マヨ&ソースなどが定番ですが、最近では、納豆の上蓋がディスペンパック仕様になっているものがあるなど、徐々に種類が増えてきています。

私は、片手が不自由なので、何気ない日常動作の中で、ちょっとしたことに不便を感じます。例えば、容器や包装の仕方ひとつで“食べづらい”、“開けにくい”そういう商品によく出くわします。その一つが、いわゆるマジックカットのソースやしょうゆ、カップ麺のかやくや液体スープ袋など、『こちら側のどこからでも切れる！』が、切れない。そのほか、コーヒーや紅茶に付いてくるポーションタイプのミルクやガムシロップについても、つまむ部分が小さく飛び散る心配もあって、なかなか開けづらい。誰かと一緒の時は頼めるけど、一人なら行儀悪いなあと思いながらも、つい口で開けちゃうこともしばしば。

そこで、毎回思うのだけど、マジックカットの袋系も、ポーションタイプの液体系も、ディスペンパックにしてはどうか～と。私のように、手が不自由な人だけじゃなく、例えば、携帯電話(スマホ)しながら、とか、子どもを抱っこしたままでも、とか、片手で簡単に開けられるって便利だと思いませんか?!

ただし、2種類が一緒に出てくる画期的な発明だからこそ難点が。“〇〇だけで良い”っていう人や、量を調節したいっていう人が結構いると思うんだよね。私、マスタード苦手だし。だから、1つずつ個別に出てくるバージョンもぜひ作って欲しいなあ。あと、容器自体に目印とか付いている商品が少ないので、色や形を工夫(改良)して間違えないよう規格統一して欲しいなあ。ますます、人に優しい、そして使いやすい商品がたくさん増えること期待します。

皆さんも、これを機に、ユニバーサルデザインを意識しながら生活してみてください。

普段から気にしていると、次の進化に繋がる何かを発見するかもしれませんよ～。そして、今より、もっと快適な生活が送れるかも！



= つくし =



= ふきのとう =

福島の実況-今もなお、福島に住みながら-

菅野 真由美さん(福島リーダー)

震災により福島県では今も16万人が避難生活を強いられています。地震、津波、そして原発事故による避難のため、県内の応急仮設住宅や公営住宅、民間の借り上げ住宅で9万人近くが暮らし、また県外に避難した人も7万人にのぼり、全国に散らばったままです。

私たちNPO法人ユニバーサルデザイン・結(ゆい)は女性建築士が中心となり、応急仮設住宅の実況をユニバーサルデザインの視点から調査しました。夏は蒸し風呂のよう、冬は底冷えのするプレハブ仮設。狭い上に段差などのバリアの多い仮の住まいでは人間らしい生活ができない状況にあります。高齢者や障害のある方も過酷な生活を強いられ、その支援をどう繋げていくかが課題となっています。

□ “おもいやり”が原点

ユニバーサルデザインチェックをして感じた部分と、住んでいる人々の声を報告書にまとめました。その声に耳をすますと、比較的簡単に変えられることが多いことに気がつきます。しかも、初めから配慮することによってコストも抑えられ、後での手直しや付加の手間がなくなるのです。提供する側にほんの少しの想像力、つまりは“おもいやり”の気持ちがあれば、避難という過酷な状況下での仮の住まいも、もっと快適なものになるはずなのです。

「避難所とは雲泥の差、天と地獄ですよ」とは、避難所を転々とし、やっと仮設住宅に入居した人の言葉でした。当時、国からは「どんなことをしても、5月末までに必要戸数を確保せよ」との指示があったと聞いています。避難所から仮設住宅に移った方々は、心底ほっとしたに違いありません。しかし、時間と効率優先のあまり、大事なものを見落とし、今になってその後始末に奔走しなければならないという結果をつくってしまい、それが多くの避難の人々を傷つけています。

□ 聞き取りからわかった過酷な状況

この調査は主に自治会長さんに聞き取りをさせていただきました。桑折駅前仮設の浪江町自治会長の小澤さんは、仮設住宅の実況を県やメディアなどに訴えてきました。猛暑の夏、サウナのように気温の上昇したせまい住まいの中で生活していたのです。自らまとめた報告書の最後には、「今後、このような応急仮設住宅の建設を“人的災害”により建設をすることのないことを願う」とあります。浪江町の方々は、ほとんどが原発事故の被害により避難生活を続けています。

いわき市に避難をした広野町自治会長さんも、同じことを訴えていました。さらに、「この仮設住宅地からは孤独死は一件も出したくない」と、毎日、お年寄りや一人暮らしの

方々を訪ねて、声をかけていました。

また、南相馬市で出会った親子は、70歳代のお母さんが、障がいのある40歳代の娘さんを介護していました。“抽選で当たった”からと、早い時期にプレハブの仮設住宅に入居したのですが、車いすの娘さんは、週に一度デイサービスへ通うものの、他の6日間は支援がないと一歩も外へ出られない状態です。なぜならその住戸は、傾斜地に建っており、地面から居室まで計70cmもの段差があるのです。車いすの人は、とても自力では外へ出られません。

「足が痛くて・・・」という母親も、毎日、その段差を乗り越えての生活でした。



□ アンケートから聞こえた悲痛な叫び

住民の皆さんにも仮設住宅の現状についてのアンケート調査も行いました。そのアンケートの中に、「国会議員の人なども、ここに1日でも住んで現状を体感してほしい」旨の声がありました。さらには、「設計者も住んでみれば、調査するまでもないのでは」という私たちのような仕事をしている者には厳しい指摘もありました。

□ 福島らしいしくみを

そんな中、女性として嬉しく、そして福島らしい取り組みを目にしました。飯舘村のほとんどの仮設住宅地には「管理人」という役割の方がいます。その仮設団地に住む方で、団地内のコミュニティ保持のため、さまざまな役割をこなしています。ほとんどが女性なのですが、このようなしくみも地域の安全や住民の安心につながっていて、日ごろから女性の声が村の運営に活かされていることがうかがえます。飯舘村が発信している、「までの心」がこのような場面でも発揮されていて学ぶところは多いと感じます。

□ これからのために

これから先も、いつ起こるかもしれない災害。そしてもう、原発事故は考えたくありませんが、どんな二次災害が起きるかわかりません。その時に、こんな過酷な状況は二度と作り出してはならないと強く思います。

これから、仮設住宅はどうなっていくのか。設置期間が一年延びて、三年という限られた時間だとしても、残すところ二年あまり。この期間で、今後の生活の答えは出るのでしょうか。もし、長期化が決定的なものになるのであれば、これからも、住民の声を拾い集めるため、調査と支援を継続していくことが重要であると思います。

幸いにも昨年秋から、断熱化や雪への対策などがほどこされました。また今年4月には、物置の設置や追い炊き機能付き給湯機への交換など、さらなる改善策が政府から発表されました。しかし、現場の方々の反応は冷ややかで、「今さら・・・」というこえが聞か

れました。それよりも、いつまでここにいることになるのかということに関心が移っていて、疲れ切っていることがうかがえます。

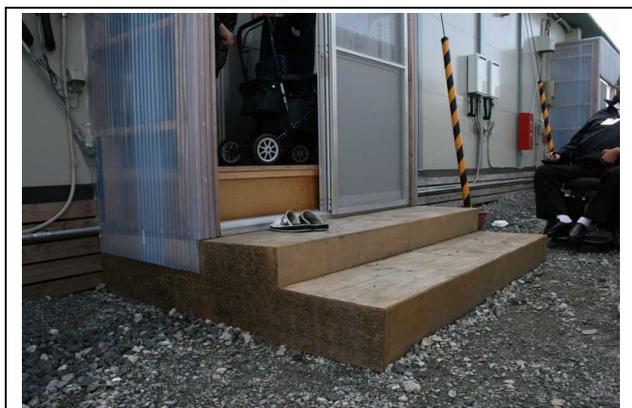
災害という状況下では、心身ともに傷ついた人々を包む住まいが応急仮設住宅です。だからこそ、安易ではなく従来の仮設住宅の考え方を再考し、「最低限の快適さ」は保証されなければなりません。まさに応急仮設住宅におけるユニバーサルデザインは「最低限の快適さ」であり、それは“おもいやり”から作られるものなのです。

今、福島県では仮設住宅地の再編が始まっています。「長期仮設住宅」という考え方も視野に入れながら、新たな住環境の構築が急務となってきています。

そして東北が復興に向かっていくためには、ハードとソフト両方のやさしさを兼ね備えた“ユニバーサルデザインの視点”は決して忘れてはならないものです。新しいまち、仮のまち、新天地での新たな生活をする人々。悲しみや苦しみを乗り越え、穏やかな暮らしが一日も早く戻ることを願いつつ、避難を続ける人々と共に、福島の地で生きてゆこうと思います。

一級建築士

NPO法人 ユニバーサルデザイン・結（ゆい） 会員



プレハブの応急仮設住宅(南相馬市)

美しいまち

NPO 法人秋田バリアフリーネットワーク 佐々木 孝さん
(秋田リーダー)

まちは顔であるという。それは単に建造物や景観などの物理的な特徴を指すものではない。都市の表情は、そこで生を営むすべての人々の生きざまや将来への夢とその実現のありようとして現れるのである。

地方の諸都市はいま例外なくスプロールの進行と中心部の空洞化にむしばまれている。中心市街地は「歯抜け通り」や「シャッター通り」と化し、利便性と賑わいに貢献していた地元小商店が撤退すると間髪を入れず携帯電話の代理店が軒を並べる。それも所期の普及目的を達成すれば一夜にして姿を消す。既存の大型集客装置である病院や業務施設が移転した跡地では、何をどうすればよいかについて地元商店街と行政、または商業者間の利害が錯綜し、計画は果てしなく迷走していく。こうしてまちは、都市経営の観点からルールのないデスマッチの舞台と化し、成り行き任せの経済原理に身を任せるしかない。

無秩序で果てしのない都市のスプロール現象、地域の実態とかけ離れた土地利用計画、人より車が優先される道路交通行政、惜しげもなく新建材の建築物に置き換えられる歴史的な建造物、撤退後の空き地にパッチワークのように無秩序に（経済原理に従ってというべきか）配される仮設店舗、さらにはユーザーより企業を向いたものづくりやサービスのありかたなど、まちづくりの様々な局面において、どこへいくのか行き先不明なまち、いわゆる顔の見えないまちづくりがいま進行している。この営みがきわめて危険であることをわれわれは地球規模の環境破壊などから学んできたのではなかったか。われわれがなにを望んでいるのか、どこへ行こうとしているのか。これを見極める叡智とそれを実現する行動力がまちづくりには欠かせないのである。



まちは人々の生活の舞台であり、まちづくりは生活のすべての領域にわたる営みであるから、それにたずさわるものは、専門の如何を問わず人間生活に対する叡智と展望が必須の条件となる。人間疎外の経済一辺倒や理念なき技術至上主義の価値観に疑問がなげかけられている現在において、たとえばヨーロッパの一見保守的で古めかしい町のなかに、どこに視座を据えるかというこれからのまちづくりに多くの示唆を見るのである。

「あなた方の町を見せてくだされば、わたしはあなた方が何を考え、何を望んでいるか言い当てて見せましょう。美しい町では人の心も美しく、醜いまちでは、人の心もまた貧

しいものです」ーエリエール・サーリネンー

※スプロール (sprawl) 現象とは、都市部から郊外に宅地が無秩序・無計画に広がってゆく現象(広辞苑より)

(第2号発行にあたって)

創刊号を発行したのは、今年の3月でした。

第2号を発行しようと原稿を7月に依頼しまして、8月には原稿をいただいておりますが、このたび大幅に遅れての発行、誠に申し訳ありません。

原稿をいただきましたバリアフリーリーダーの3名の方を始め、各リーダーの方々に深くお詫び申し上げます。

このような状況ですので、今回の原稿を読まれるときは、昨年7月頃のイメージでお読み下さい。

今後とも、皆様とともにバリアフリーを推進することを目的にバリアフリーニュースを発行して参ります。

バリアフリー施策、並びに公共交通機関に関するご意見・改善要望等を運輸局で開催する会議等で活用させていただきたいと思っておりますので、東北運輸局 交通環境部 消費者行政・情報課まで、メール又はFAXでお寄せ下さい。

このニュースは、バリアフリー関係の話題を中心に、東北6県及び市町村のバリアフリー関係担当者、交通事業者、バリアフリーリーダー並びに社会福祉協議会等にお送りしています。

ニュース送付先の追加、変更、停止等を希望される方は、当課へご連絡ください。

がんばろう!東北



東北運輸局交通環境部消費者行政・情報課
〒983-8537
仙台市宮城野区鉄砲部町1番地
TEL:022-791-7513
FAX:022-791-7539
E-mail:tohoku-syougyouka@tth.mlit.go.jp